

日本におけるスピリチュアルケアの意義に関する研究  
—福祉現場におけるスピリチュアルケア・ニーズの視点から—

医療法人社団うらべ整形外科・内科 氏名 瀧ヶ崎明雄 (会員番号008741)

高齢者・施設福祉・終末期

## 1. 研究目的

今日の高齢者終末期ケアにおいて、不老長寿は人類の長期における願望であるが、人工呼吸器や胃ろうによる生命維持における延命治療で長寿を実現する現状がある。一方、高齢者終末期スピリチュアルケアについて潜在化しているが、今日的課題になっているのではないかと推察する。その現状から「スピリチュアルケアの必要性」を事例を用いて明らかにし、宗教的に偏らず、精神的ニーズやそれに伴う身体的ニーズにおけるスピリチュアルケアの重要性を検証したい。また、スピリチュアルケアを行なう特別養護老人ホーム等におけるスピリチュアルケアスワーカーの必要性について、業務内容及び資格について検討していきたい。スピリチュアルケアの定義は『病気や高齢において身体的・精神的・社会的・宗教的苦痛の「全体的苦痛」に対するケアであるが宗教に偏らず、スピリチュアルな苦痛(スピリチュアルペイン)に対応した「非言語・言語的ニーズ」であり、そのようなニーズに対応するケア』である。

## 2. 研究の視点および方法

高齢者の終末期におけるスピリチュアルケアについて事例を考察し、研究方法は村田久行の先行研究事例を通してスピリチュアルケアの効果と有効性について検証していく。

## 3. 倫理的配慮

事例についてはプライバシーに配慮し、個人が特定できない記述をしている。

先行研究については原典が見つからず、『村田久行(2006)「改訂増補 ケアの思想と対人援助」』川島書店 P130. 20-22 行目、P132. 22-29 行目、P131. 1-7 行目、P132. 3-19 行目、P132. 27-P133. 11 行目、P132. 12-20 行目から引用文献及び参考文献に『伊田広行(2004)大阪経大論集第54巻第5号「スピリチュアルケアをめぐる論議を見渡す」WHOパリアタイプケアのなかのスピリチュアルケア』大阪経大会、吉村克己(2014)『考えるシリーズ「スピリチュアルケアを考える—スピリチュアルケアって何?」』臨床パストラル教育研究センター (<http://mag.gto.ac.jp/cat8/cat28/post-208.html>) から引用している。

## 4. 研究結果

村田久行(2006)における先行研究の事例について検討し、共通項に以下の研究結果が挙げられる。

1. スピリチュアルケアについては、傾聴を主として利用者を理解する。2. 気付きにより援助者も援助技術向上となる。3. 人間の尊厳により生き抜いた満足感を得ることお

よび「次の生」を意識化し、魂としての存在を促し、「現在の生」を充実した生き方を援助する。

事例1. Aさん(80歳代・女性・軽度アルツハイマー性認知症)は教師というプライドを持ちつづけ、スピリチュアルケースワーカーの傾聴により社会的過去を認めAさんの満足感が得られ、精神的安定したと介護職員から報告があり、ナラティブ・アプローチおよび非言語・言語コミュニケーションを行い、今の自分が何もできない恥ずかしさが感情表出され、精神性及び存在的価値観にAさんに気付かせる援助、Aさんのニーズによって科学的枠組みでの人間を超越した者に準ずる社会福祉士、精神保健福祉士などの相談員、臨床心理士等が留意し、配慮した。

事例2. Bさん(70歳代・女性・悪性腫瘍)は点滴のみで衰弱し、呼吸困難で発語できず、両手全体に浮腫が見られた。非言語・言語的コミュニケーションで、笑顔になり、安心した様子でワーカーの手を離さなかった。3週後の訪問で両手の浮腫は少しずつ消失し、呼びかけに「はい」と応答するまで回復した。言語・非言語的コミュニケーション、側面的支援が他の業務より優先された。

事例3. Cさん(80歳代・女性・糖尿病)は、治療に消極的で「死んでもいい」と言っていた。ワーカーの数度の訪問、医師の診察を受け入れ、右脚壊死は切断したくない本人の意向があったが、医師は放置すると死亡すると宣告した。Cさんは積極的治療を受けたくないが、ここ(特別養護老人ホーム)で逝きたいと希望した。その人らしい生を全うする援助にスピリチュアルケアの全人的なケアが不可欠となる。

スピリチュアルケア(傾聴が主となる)は利用者における高齢者に心理的安定を与え、個としての生(現世)を超越した次元に利用者やその生涯を振り返ることができ、残存する「生」の意義も可能となり、心と心の関わり合いにおいても不可欠である。

## 5. 考察

今後においてスピリチュアル・ケア・ニーズは増大傾向にあると考える。

今回の事例を通しては、看取りの際の「魂としての生のケア」に力点を置いている。「死亡していく利用者」ではなく、「存在こそ価値がある」ということを見直し、寄り添うケアを行うことで、終末期高齢者が救われることが判った。有効な担い手にスピリチュアルケアを行うための人員配置としてスピリチュアルケースワーカーが必要であり、介護福祉におけるソーシャルワーカーを専門職配置し、4-5名のチームにてスピリチュアルケアを行う必要がある。更に職員研修に個別面接形態のスピリチュアルケア導入を行う。このようなケア実践概念を核とした対人援助業務の体系的見直しが不可欠である。そのため、政府は施設にスピリチュアル・ケースワーカーの配置基準等を新設し、予算を増額し、ケアする側にも業務をこなしやすい環境整備を働きかけていくことが肝要である。